

【目的】嗜銀顆粒症 (argyrophilic grain disease、以下 AGD) は、1987 年 Braak らによって最初に報告され、リン酸化 tau および Gallyas-Braak 染色を始めとする嗜銀染色に陽性となるコンマ型や紡錘型のニューロピル内封入体を有する。AGD は、高齢者認知症や気分障害を来し得る独立した疾患概念と考えられる一方で、多くの神経変性疾患との合併があることや、生前無症候と考えられる剖検例に偶発的に発見されることが報告されており、その臨床病理学的に意義に関しては、未だ定見を見ない。法医解剖は生前に明確な疾病を指摘されていない症例を多数含むことから、未発症または疾患早期の神経病理像を探索するのに有用と考えられるが、世界的に検索対象となることは非常に少ない。今回、多数の連続司法解剖例から嗜銀顆粒症を有する症例を抽出し、病変出現頻度、生前の状況、他の神経変性疾患病変の合併頻度を示し、さらに死因との関連、特に自殺との関連の有無につき検証を試みた。

【方法】富山大学大学院医学薬学研究部法医学講座にて、2009 年 7 月から 2018 年末までに法医解剖された事例のうち、神経病理学的検索が可能であった 1,347 例 (男性 823 例、女性 524 例、0 才から 101 才、平均年齢 62.4 ± 11.9 才) を検索対象とした。脳内各所から組織標本を作製し、Gallyas-Braak 染色、免疫染色を施行して、AGD に合致する症例を抽出した。他の神経変性疾患についても、汎用されている病理診断基準を用いて評価した。

【結果】1,347 例中、264 例 (19.6%、男性 129 例、女性 135 例、46~100 才、平均年齢 80.1 ± 9.3 才) が AGD を有していた。男女別の検索総数における比率は男性が 15.7%、女性が 25.8%であり、女性は男性より有意に有病率が高かった ($p < 0.001$)。加齢につれて出現率が上昇しており、60 才以上の有病率は 25.0%、80 才以上が 40.7%であった。生前、認知症と病院で診断されていたのは 68 例、病院では診断されていないが、家族が認知症と考えていたのが 21 例、精神科の病歴を有している症例が 37 例であった。AGD 例では 87 例 (33.0%) であった。女性 (62 例) では男性 (25 例) に比して有意に自殺者数が多かった ($p < 0.005$)。AGD の stage は stage 1 が 41 人、2 が 105 人、3 が 118 人であった。NIA-AA criteria によるアルツハイマー病変の評価では、not : 92 例、low : 64 例、intermediate : 71 例、high : 37 例であった。Lewy 病理の合併を 51 例 (19.3%)、PSP36 例 (13.6%)、CBD、TDP-43 proteinopathy が各 2 例で (0.8%) 認められた。以上の結果は、本邦における AGD の有病率の近似値、臨床病理学的背景の一部を明らかにしたと考えられる。

AGD の年齢別 stage 分布、合併病理

	AGD stage			NIA-AA				Lewy	PSP	CBD	TDP-43
	1	2	3	not	low	intermediate	high				
40-49 才	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0
50-59 才	0	0	5	4	1	0	0	1	0	0	0
60-69 才	7	10	9	16	7	3	0	3	1	0	1
70-79 才	10	36	29	24	19	24	8	11	11	1	1
80-89 才	18	49	60	37	32	34	24	30	20	1	0
90 以上	5	10	14	9	5	10	5	6	4	0	0
計	41	105	118	92	64	71	37	51	36	2	2